

父と弥生語

長田 礼子

わたしの父、長田夏樹が「弥生語の復元」を手がけたのは、1985(昭和60)年の「科学万博一つくば'85」(略称つくば博)がきっかけでした。つくば博のパビリオンに松下電器グループが出展した「松下館」がありましたが、この展示に関連して「弥生語の復元」に取り組むことになりました。

電通と学習研究社が企画した「松下館」は「エレクトロニクスが古代と出会う」というテーマで、弥生語を話す弥生人ロボットが竪穴住居で生活する様子を展示する計画でした。そこで、弥生人ロボットがしゃべる弥生語を考えてほしいと電通から父に依頼が来ました。つくば博の前年、1984(昭和59)年のことでした。

「松下館」の総合監修は騎馬民族征服王朝説を唱えた東洋学者、江上波夫さんで、実際に取り仕切ったのは江上さんの高弟にあたる筑波大学教授の増田精一さんでした。このお二人の推薦で、父が「弥生語の復元」に取り組む運びとなったのです。

江上波夫さんは1906(明治39)年生まれで、父より14歳年上です。東大の東洋史を出て北京に留学した江上さんは、当初、モンゴル高原をフィールドにした考古学者でした。特に江上さんが企図した「東亜考古学会蒙古調査班旅行」の記録は、朝日新聞から『蒙古高原横断記』として刊行され人口に膾炙しました。この調査旅行は1931(昭和6)年6月に張家口を出発し、8月末に通遼に到着して終了しました。馬賊の跳梁する灼熱の大地を満州事変直前の時期に調査旅行し、壁画の色彩も鮮やかな慶陵や白塔子など遼の遺跡にも行っていません。

父が江上さんと知り合ったのは、まだ東京外語蒙古語学科の学生だった頃でした。初対面は竹内幾之助さんのご自宅でした。竹内さんは父の恩師で、「モンゴル語索引カード」の作成を手伝うため、その頃、毎日のようにご自宅にうかがっていました。実は、江上さんと竹内さんは「蒙古調査旅行」に同行した仲でした。

その折に、江上さんがウラジミルツォフの著作を持っていることを知ったのです。ウラジミルツォフはソ連の著名なアルタイ諸語の研究者で、父はこれを読むためにロシア語の学習に励んだのです。あちこち探してもなかった現物が江上さんのところにあるというので

す。欣喜雀躍した父は、ウラジミルツォフの著作を借り、江上さんのご自宅にうかがうことになりました。

自由闊達な江上さんは元気な若者が好きで、初対面から話が弾んだようです。お宅を訪問してはごちそうになり、モンゴルの現地の様子や当時江上さんが取り組んでいたオロンスムの遺跡の話に耳を傾けました。江上さんは文京区本郷西片町で育ったのですが、父の母親の実家が西片町にあったので、お互いに親しみを感じた面もあったのかとも思います。

江上さんは匈奴の研究から学問を始めた方で、匈奴の単于やモンゴルのハーンのようにエネルギッシュでカリスマ性のある学者でした。興味深い地域の研究や遺跡の発掘のためにプロジェクトを企画し、研究者や資金を集める手腕は卓越していました。根っからのフィールドワーカーでしたので、1948（昭和 23）年に発表した騎馬民族征服王朝説を従来の研究の総括にして、戦後、国交の途絶えた東アジアの研究は封印しました。そうして、フィールドをオリエント方面に移したのです。早くも、1954（昭和 29）年に日本オリエント学会を立ち上げ、1956（昭和 31）年にはイラクで、次いで1958（昭和 33）年にはイランで発掘調査を始めています。この「東京大学イラク・イラン遺跡調査団」に考古学者として参加したのが、増田精一さんでした。

1970 年代になると、日中の国交が回復し、日韓関係も改善が見られるようになってきました。1972（昭和 47）年に、江上さんは韓国政府の招待で、百済の遺跡を見学しています。百済時代の遺品は日本の古墳時代のそれと酷似しています。それらを眺めながら、江上さんは騎馬民族征服王朝説に立ち戻ったらしく、「東アジアの古代文化を考える会」の会長となります。

「東アジアの古代文化を考える会」は1973（昭和 48）年から毎日新聞との共同開催で＜日本古代文化シリーズ—講演会とシンポジウム＞を開いています。1973（昭和 48）年11月には第5回として、「謎の四世紀とその前後」が開かれ父も参加することになりました。その成果は『謎の四世紀』として、毎日新聞から刊行されています。父は「倭人の言語とその展開」と題して、『魏志倭人伝』の固有名詞を3世紀洛陽音で読んでいます。

父が『魏志倭人伝』の固有名詞について最初に論じたのは、「魏志倭人伝訳音の音価について—上古中国語音韻体系との関連において」という論文です。勤務していた神戸市外国語大学が1962年9月に刊行した『神戸外大論叢』に載りました。もともと日本語の源流に興味を持って学問を始めた父が、記載された最古の日本語—『魏志倭人伝』の固有名詞—に関

心を持つのは自然な流れでした。また、明清の訓詁考証学者の末裔を自負していた父は典籍中に記載された中国周辺諸民族の固有語を中国音韻学で解説する研究を重ねていましたので、書かれるべくして書かれた論文でもありました。

しかし、この論文は中国音韻学の知識がなければ理解はできず、一大学の研究誌に掲載されたものだったので、世に喧伝されることはありませんでした。しかし、『謎の四世紀』が世に出ると、折からの古代史ブームもあって、注目されることになります。1979年には学生社から『邪馬台国の言語』を出しています。邪馬台国は弥生時代に編年されておりますので、父は弥生時代の言語の研究者と目されるようになりました。

1980（昭和 55）年 1 月、学習院大学で開かれた「日韓共同古代史シンポジウム」に父は言語学部門の講師として呼ばれています。このシンポジウムは「江上波夫教授を中心に、日・韓の著名な歴史学者による最新の知見に基づいた」シンポジウムでした。こうしたいきさつから、江上さんは「弥生語の復元」に父を推薦したのだと思います。

一方、増田精一さんと昵懇になったのは、1979（昭和 54）年 2 月の「日中友好学術文化訪中団」がきっかけでした。この旅行はウルムチやトルファンといった西域を見学してから、蘭州さらに西安を巡る旅行でした。憧れのベゼクリクの千仏洞や高昌故城を目の当たりにした父は夢見心地だったようで、珍しく絵葉書を 2 通母とわたし宛に送っています。

二十数名だった同行者とも終始和やかな雰囲気、団長だった増田さんとも話を交わすようになりました。話してみると、増田さんは二中（今の東京都立立川高校）の 1 学年後輩で、同じ絵画部に所属していたのでした。

こうしたいきさつで、父は 1984 年 3 月下旬に電通から依頼のあった「弥生語の復元」を引き受けることになりました。ちなみに、「弥生語」という名称は電通が提案したもので、父は「倭国語」と称しておりました。電通は単に弥生人の話す言葉なので、「弥生語」と名付けたようですが、広告会社らしい人心を惹くネーミングではありません。

電通によると、「松下館」の入館者が弥生時代の竪穴式住居ゾーンに入ると、弥生人口ロボットが「弥生語」で声をかける設定になっているのだそうです。電通の提示した仕様書には三つの弥生語文の案が記載してありました。父は〈案 2〉を選んだのですが、記紀万葉に記載してある語彙が多く含まれる文を選んだのだと思います。なにしろ『魏志倭人伝』には地名・人名・官名といった固有名詞しか記載されておらず、文章にするなら記紀万葉の文を参照するしかないのです。

つくば博は1985年3月17日に開幕することになっていました。そのため、11月には完成した弥生語を録音しなければなりません。父は夏休み中、弥生語の復元に取り組んでいました。まず電通の提示した文と意味の合う語彙を記紀万葉から拾い出しました。そうして、一つ一つの語音を原始日本語研究で論証した母音体系や子音体系で読み、さらにアクセントをつけました。こうして完成した弥生語文を、11月27日に父の監修のもと、大阪中之島にある電通映画社の録音スタジオで録音しました。プロの声優が弥生人を演じています。

3月8日には松下館の竣工式兼開館式があり、招待された父はつくばの万博会場に足を運びました。そこで、弥生語を話す弥生人ロボットを面白く眺めたあと、披露パーティーに出ました。久方ぶりに出会った江上さんと増田さんに賞賛を受け、大いに面目を施したようです。

この弥生語「ナムタチ タライチョ？(あなた方は誰ですか)」は子供受けが非常によく、電通からは「弥生語豆辞典」を作りたいとの申し出を受けました。5月5日から始めて、土日先着200名の小中学生に配布するのだそうです。真っ赤な表紙に松下館のマスコットキャラクター・マツゴロー君が貫頭衣を着て石器を持った姿で笑いかける、いかにも子供の好きそうなかわいい辞典でした。

このつくば博の最中に播磨町からの訪問者がありました。播磨町の大中遺跡の地に郷土資料館を開館するのですが、「大中国古代の村」に住む弥生人少年の話す弥生語を考えてほしいという依頼でした。播磨町は神戸市の西にあり、『播磨国風土記』に記載された「阿閉の村」です。依頼者の郷土愛に打たれた父は『播磨国風土記』が大好きということもあって、この依頼を引き受けています。

さらに、1992年には板付遺跡の学芸員、力武卓治さんが我が家に来られました。板付遺跡弥生館で上映されるビデオに弥生語を使いたいとのことでした。力武さんは弥生館に流すBGMも制作し、この弥生語の歌も父が考えました。

その後、力武さんは「板付弥生ムラだより」を父のところに送り続けてくださり、父はこれを読むのをたいそう楽しみにしておりました。

父が亡くなって十年以上を経過したわけですが、改めて父が学問を通して多くの人と知り合い交友を深めていったのだなあと感じました。そうした交流が父の学問と人生を豊かで幸福なものにしていったのでしょう。